

17) 分化型胃癌の組織異型度と核 DNA 量

衛藤 薫・岩淵 三哉
 山中 秀夫・多田 哲也
 渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)

目的と方法：従来、分化型胃癌の悪性度と核 DNA 量の特性との関係は、種々の組織異型度の癌が区別されることなく、一括して検討されてきた。しかし、上記の関係は癌の組織異型度別に再検討することが必要である。今回は、低異型度癌を、短径 6 μ m 未満の核を持つ癌細胞が構成細胞の 3/4 以上を占める癌、高異型度癌をそれ以外の癌と定義して、分化型胃癌の核異型度と核 DNA 量との相関について検討した。検討材料は胃原発の分化型 sm 癌 9 個から得られた低異型度癌領域と高異型度癌領域を用いた。核 DNA 量の測定は外科的切除胃癌のホルマリン固定パラフィン包埋ブロックから作成した単離細胞塗沫標本に DAPI 染色を施し顕微鏡蛍光定量測光法で行った。

結果：1) 低異型度癌は diploid 腫瘍優位であった。2) 高異型度癌は低異型度癌に比べて aneuploid 腫瘍が優位であった。3) polyploid 細胞の出現程度は、高異型度癌では低異型度癌よりも高かった。4) 核 DNA 量の ploidy の特徴は、低異型度癌と高異型度癌とは異なっていた。

考察：分化型胃癌の悪性度と核 DNA 量の特性との関係は、低異型度癌と高異型度癌とに 2 分類することにより詳細に解析できると考えられた。

18) 早期胃癌の臨床病理学的検討

—内視鏡治療の適応を知るために—

梨本 篤・佐々木寿英
 加藤 清・佐野 宗明 (県立がんセンター)
 筒井 光広・赤井 貞彦 (新潟病院外科)

平成元年末までに当科で切除され臨床病理学的検索のなされた単発性早期胃癌 1088 例を対象に、肉眼型、長径、深達度とリンパ節転移の関係を解析した。

【成績】1) リンパ節転移率は m 癌 2.2%、sm 癌 17.2% であった。隆起型 m 癌では 1.3% と低率であるが sm 癌になると 16.0% とリンパ節転移が高率であった。平坦型には 1 例も転移がみられなかったが、m 癌でも陥凹型で 2.5% に、II a + II c 型では 2.2% に転移が認められ、sm 癌になると各々 7.6%、52.4% と高率であった。

2) 2cm 以下の隆起型 m 癌には 1 例も転移がなかったが、sm 癌では長径 1.8cm から転移がみられた。陥凹型では m 癌で長径が 1cm 以下でも 17.1% sm 浸潤があり、sm 癌ではあるが 0.5cm の低分化型腺癌にリンパ節転移がみられた。

【結語】積極的内視鏡治療の適応基準は、手技および確実性の面より現時点では、長径 1cm 以下の隆起性 m 癌であり、70 歳以上の高齢者ならばさらに良い適応と考えられた。

特別講演

「癌の遺伝子診断」

東海大学医学部病理学教室助教授

堤 寛 先生